

近年の重要遺跡・遺物の発見と古代史研究

和田 萃

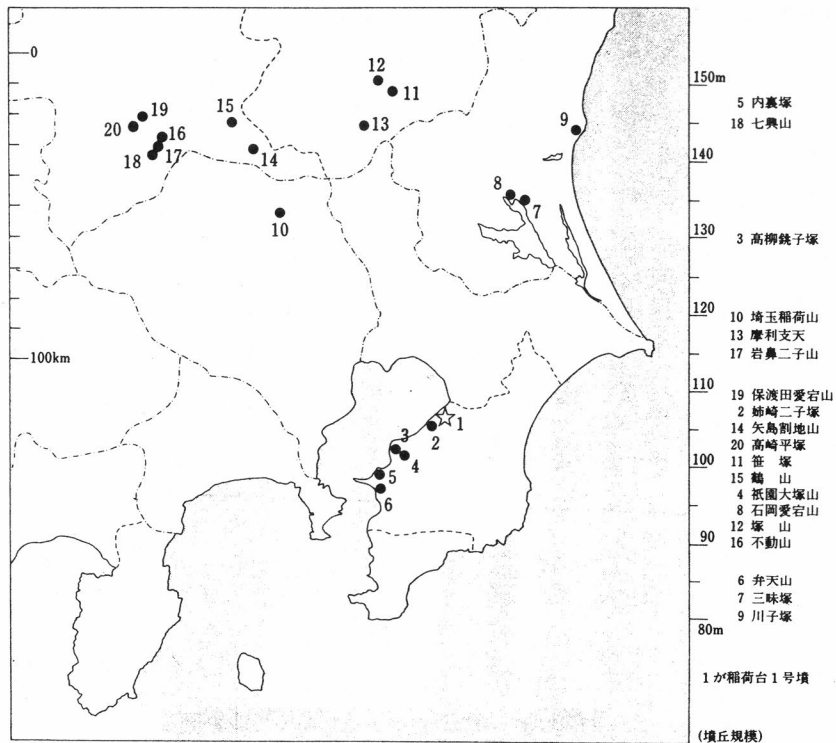
1 文字資料の発見—金石文

日本古代史研究の立場から、近年10年間ぐらいに発見された重要な遺跡・遺物を取り上げて、お話をさせていただこうと思います。

1978年に埼玉県の稲荷山古墳出土の鉄剣から銘文が発見され、すでに12年が経過しているわけですが、あの表57字、裏58字の文字は、時を経るにしたがって重要性を増していると思います。稲荷山古墳の発掘調査は1968年に行われ、銘文の発見は1978年です。鉄剣銘文は「辛亥年」ではじまっており、471年にあたっています。あの鉄剣がもし古美術商の店頭に並んでいたとしたら、我々研究者が見た場合でも、おそらく偽物ではないかと疑ったと思うのです。この鉄剣は、正式の発掘調査で検出され、元興寺文化財研究所で保存処理中に銘文のあることが判明しましたので、比類のない価値を持っているわけです。銘文の内容は、ヲワケ臣の家の8代の系譜や、ヲワケ臣の家の功績などを記しています。日本の古代国家の成立過程を考えていく上で、5世紀後半、特に雄略朝は重要な意味を持っているわけですが、そのことを如実に示したものと思います。稲荷山鉄剣銘文の発見により、熊本県の江田船山古墳出土の鉄刀の銘文の読み直しも行われ、雄略朝における王権の版図を推定できるようになりました。そういうことで金石文の発見をまず最初に取り上げてみましょう。

まず、稲荷台^{いなりだい}1号墳出土の鉄剣銘文です。1987年11月に千葉県市川市の稲荷台1号墳から出土した鉄剣は大体73cmぐらいますが、表と裏に銀象嵌の文字のあることがわかりました。古墳は1976年12月に発掘調査され、保存処理中に銘文のあることが判明したわけです。この古墳は小さな円墳で、直径28mぐらしかありません。出土しました須恵器から、5世紀中ごろの築造と考えられています。したがって、鉄剣はそれより遡る5世紀中ごろから前半のものということになりますが、表に「王賜」という文字を書き出しています。その下の文字は少し読み取りにくいのですが、「敬って保持せよ」という内容になるかと推定されています。裏面は「此廷刀」で始まる吉祥句であり、漢文形式の簡略な文章を象嵌していたわけです。この稲荷台1号墳の鉄剣銘文には、いろいろな問題点があります。「王」という言葉の意味がどうなるのかという点、すなわち畿内の王なのか、あるいは東

国の王を想定するのか、その点で意見が分かれます。もし畿内の王がこの古墳の被葬者に与えたものとするれば、まだ大王号が成立していない時期のものと考えられます。大王号については確実には雄略、あるいはその前の允恭から大王(オホキミ)を称していますから、それより少し前の段階で、東国上総の小首長に与えられた鉄剣ということになります。それから、小さい円墳であることが問題です。上総(千葉県)の東京湾沿岸では、5世紀前半から中ごろにかけて、5基の大型前方後円墳が築造されました。姉崎二子塚古墳(全長110m弱)、高柳銚子塚古墳(約130m)などです。それらと稲荷台1号墳を比べますと、墳形も違いますし、規模があまりに違いすぎます。その点をどのように考えるべきか、問題です。古代では、三浦半島から浦賀水道をわたって、上総へ上陸するのが東海道のルートで、ヤマトタケルの走り水での伝承は、ここを舞台にしています。したがって、上総のこの地域は交通の要衝であり、もし「王」が畿内の王とするれば、その王から上総の小首長に、銘文入りの鉄剣が与えられたことになります。簡略で類型化した文章ですから、類似のものが今後も見つかる可能性があります。5世紀前半代における畿内の王権と、東国の首長がどのような政治的関係にあったのかを考えるうえで、非常に重要な金石文だと思います。



第1図 東国の大型前方後円墳(5世紀中葉前後)(『王賜』銘鉄剣概報』による)

次に1984年1月に発表されました「額田部臣」銘の鉄剣を取り上げます。島根県松江市の八雲立つ風土記の丘の敷地内にある岡田山1号墳から出土したもので、この古墳も全長24mの比較的小規模な前方後方墳で、横穴式石室を有しています。1915年に盗掘され、各種の副葬品が出土し、鉄刀もその一つです。いろいろな経緯を経て、副葬品は一括して風土記の丘資料館に寄贈されました。それを契機に、元興寺文化財研究所において保存処理が行われたのですが、その過程で鉄刀に銘文のあることが発見されたわけです。長い文章の最後に「額田部臣」の銘文があります。古代出雲では、東部の意宇川中流域に、岡田山1号墳、あるいは山代二子塚古墳、大庭鶏塚古墳など、出雲に特有な前方後方墳や方墳が集中しています。一方、出雲西部の斐伊川流域は広大な沃地で、出雲臣や神門臣などの氏族がいました。出雲では東部と西部に大きな勢力があったわけですが、いろいろ検討してみますと、6世紀後半の欽明朝ごろに東西出雲の勢力が畿内王権に服属したと考えられます。詳しく述べる余裕はないのですが、その一つの手がかりがこの鉄刀銘文にあると思われれます。といたしますのは、「額田部臣」と記している点です。この額田部というのは推古女帝、すなわち額田部皇女の名代と考えられ、その名代が出雲に設定されて、出雲臣の一族が伴造となったことを示しているからです。従来、額田部については、応神天皇の皇子である額田大中彦との関係を考えるのが一般的であったのですが、推古のための名代とみるべきだろうと思います。額田部皇女は欽明15年(554)に誕生しており、そのための名代とすれば、この鉄刀の年代、あるいは岡田山1号墳の年代ともうまく合ってきます。ほかにもいくつか根拠があるのですが、「額田部臣」の銘文は欽明朝に出雲の服属があり、額田部が設置されたことを示しているものと思います。大和・河内に基盤をおく王権を中心に、日本列島の政治的統一が進んでいくわけですが、その王権に抵抗していた筑紫の勢力は、国造磐井の内乱で一応平定されます。毛野の勢力は、安閑・宣化朝ごろに服属があったようです。最後まで服属が遅れたのが出雲です。いろいろな点から見て、出雲の服属は欽明朝のことだと考えられ、この銘文はそれを裏付ける資料だと思われれます。

「額田部臣」銘の鉄刀の発見と前後して、兵庫県八鹿町の^{みだに}箕谷2号墳から、「戊申年五月中」と記した銘文が見つかっています。これは銅象嵌で、戊申年については、推古16年(608)であろうと推定されています。

2 5世紀史の復原

2番目に、5世紀史の復原を可能にするいろいろ重要な発見があったと思います。その一つは、各地から豪族居館が発見されたこと、もう一つは、国造制の施行を考古学的に裏付けできる材料が見つかったことです。

最初に長柄遺跡^{ながら}がありますが、これは1989年に奈良県御所市から発見された、5世紀後半の豪族居館です。いろいろな経緯がありまして、第1次調査では、正式に発掘調査されないままに、破壊されました。巨大な柱が出たらしいのですが、埋蔵文化財担当者も知らない間にもみ消されてしまったのです。それで第2次調査では、発掘調査が行われまして、長柄小学校の敷地の一部で、居館跡が見つかっています。後でお話します三ツ寺居館遺構とかなりよく似たものです。張り出しを持ち、石垣を築き、周囲に水濠を巡らしています。また、居住空間と工房などの建物がセットになっています。この長柄遺跡の出土地が注目されます。この地は、古代では大和国葛上郡高宮郷で、一言主神社^{ひとことぬし}のすぐ近くです。この場所は高宮郷という郷名で知られますように、葛城氏の本拠地です。葛城襲津彦^{かつらぎのそつひこ}の娘の磐之媛^{いわのひめ}が、「葛城高宮 我家^{わがへ}の辺^{あたり}」と歌った高宮の地にあたります。その一帯に豪族居館が出土し、火災の痕跡も見つかりました。遺構の年代も5世紀後半が中心で、葛城円大臣^{つぐら}が滅亡した時期とうまく合っています。遺構の詳細は、今後の調査結果にまたねばなりません。葛城氏の居館である可能性が文献史料の上からも言えるのではないかと思われるのです。

次に布留遺跡^{ふるろ}が挙げられます。布留遺跡は、奈良県天理市の石上神宮^{いそのかみ}から少し西へ下ったところ、天理大学のある一帯です。ここから、1989年に5世紀中葉の大きな人工の大溝が発見され、また居館の一部が発見されています。この大溝は、台地を人工的に掘削したもので、布留川から水を引いています。遺構のレベルから復原しますと、どうも石上神宮のすぐ北の辺りに井堰を設けて、そこから延々とこの台地まで大溝を掘削しているようです。また布留川の水ガカリの調査成果によりますと、総延長2～3kmにも及ぶ大溝で、灌漑用水として利用されたことが想定されています。この一帯は物部氏の本拠地であり、また石上神宮があって、大和王権の武器庫が石上神宮の境内地につくられたと伝えられる重要な場所です。そうした地域に、5世紀中葉の居館や人工の大水路が検出されたという点で、大いに注目される遺構です。石上神宮の禁足地^{いそのかみ}については、天理参考館の置田雅昭氏の研究によって、5世紀後半に埋納されたことがわかっています。ですから、石上神宮の禁足地、すなわち石上神宮の成立と、布留川の南岸が開発されてそこに物部氏の居館が建てられた時期とが一致するわけです。そういう意味でも注目すべき点があると思われます。

居館遺構の代表例として三ツ寺遺跡があります。1981年の上越新幹線の工事の際に発見されたもので、豪族居館という概念が最初に導入された記念すべき遺跡です。この10年間を考えて見ますと、群馬県内における発掘業績にはすばらしいものがあります。その最大の理由は、榛名山二ツ岳の2回の爆発によって、火山灰や軽石が降下して堆積したことが

はっきりしてきたことです。それによって遺跡の年代が明確になってきたことと、遺跡・遺構の残りのよいことが大きく作用していると思われます。後でもふれます黒井峯遺跡や西組遺跡などの発見があったのも、榛名山の二ツ岳の噴火ということと密接に関わっています。三ツ寺居館遺構の場合も、噴火によって主要な建物遺構が壊滅しており、その時期を大体おさえることができます。二ツ岳の爆発は、6世紀の初頭(現在では505年あるいは506年のことと考えられている)と、6世紀中ごろの2回ありました。三ツ寺居館や黒井峯遺跡は、その爆発によって大きな被害を受けていることがわかってきましたが、遺構の残りがよかったわけです。三ツ寺遺跡の場所には、3本の川が流れております。西から井野川、^{まろふ}猿府川、唐沢川で、猿府川の中流域に三ツ寺居館、三ツ寺Ⅰ遺跡が検出されています。そしてその少し北に三ツ寺Ⅱ遺跡、さらに北に三ツ寺Ⅲ遺跡という集落跡があります。三ツ寺居館遺構では、猿府川の水の流れを引っ張ってきて、北側と東側を水濠にしています。それから人工的に掘削して、西側と南側に水濠を造っていますが、幅40mぐらいの幅の広い水濠です。西側と南側の水濠は人工的に掘り上げて、その掘り上げた土を居館内に積み上げ、そこに居館遺構が建っているわけです。復原図(第3図)には斜めに2本の線が入っています。この部分が上越新幹線の軌道敷きで、この部分の発掘調査が行われました。その他の部分は推定図です。その点を留意していただきたいのですが、中央に柵列があり、それによって、大きな正殿風の建物や井戸のあるところと、もう一つの倉庫や竪穴式住居のある2区画に分かれています。この正殿は祭祀のための殿舎だと思われませんが、南北13.6m、東西14mの大きい建物でして、その側に井戸があります。ただ周囲を水濠で囲まれているから、そんなにより水は湧かなかったものと思います。それにかかわるかもしれませんが、西の方から導水路を引いていて、水濠の中からそれを支える橋杭が出ています。導水管は木をくりぬいて作っており、居館内へ飲料水あるいは祭祀のための聖なる水を導くための、非常に手のこんだ施設です。この三ツ寺遺跡の工房からは、



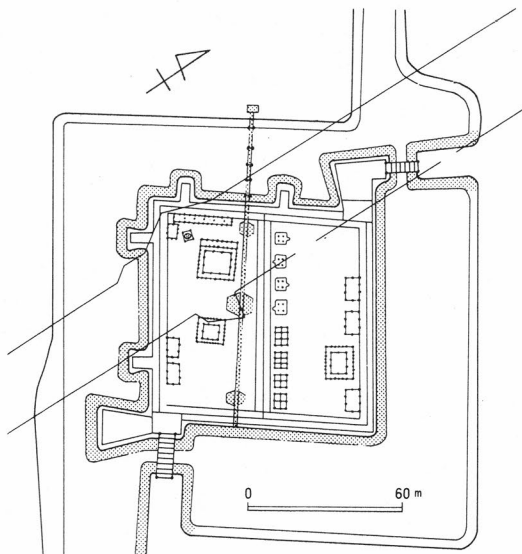
第2図 三ツ寺居館と周辺の遺跡(下城正による)

吹子の羽口や埴塙が出ていますので、銅製品などを作る工房もあわせ備わっていたことがわかります。5世紀の第3四半紀、雄略朝頃から、居館は造られています。そして先程述べました二ツ岳の第1回目の爆発で、主要な建物群や柵列群はすべて壊滅しています。6世紀前半代にこの住居だけが細々とあって、2回目の爆発で壊滅的な被害を受けた状況がわかっています。三ツ寺居館遺構が明らかになるにつれて、三ツ寺居館遺構の西北にあります保渡田3古墳との関連が浮かび上がってきています。先程の居館の内部を限ります柵列を延長しますと、3古墳の中で一番南にあります二子山古墳(愛宕山古墳)に行き当たります。この古墳は全長120mの前方後円墳で、5世紀後半、三ツ寺居館遺構が造られる頃に築造されています。それに続いてすぐ東北に八幡塚古墳が造られます。これも5世紀後半の全長102mの前方後円墳で、さらに一番北の薬師塚古墳が5世紀末に造られています。いずれも三ツ寺居館が機能していた時期に造られているわけです。三ツ寺居館に住んだ首長たちが保渡田の3古墳に葬られたものと考えられ、あるいはこの時期の上毛野君の首長の居館と墳墓であった可能性が大きいかと思われます。

6世紀初め、三ツ寺居館遺構は榛名山二ツ岳の噴火によって壊滅します。その後少しわからない時期があるのですが、6世紀後半代になりますと、井野川の下流域に綿貫観音山古墳が造られています。毛野勢力が畿内の王権に服属した背景には、6世紀初めに居館あるいは集落、水田が壊滅的な被害を受けたことと密接に係わっているかと考えられます。

最近、この二子山古墳、二重の周濠があるんですが、その外濠のさらに北側のところで、

ほ場整備に際して調査が行われ、「突出遺構」と呼ばれるところから、5世紀後半の人物埴輪群がたくさん見つかりました。従来、古墳の調査と言いますと、墳丘のトレンチ調査が中心でした。例外的には、京都府の私市円山古墳で、墳丘全体の調査が行われ、また大阪府の津堂城山古墳では周庭帯の調査も行われています。しかし周濠や周庭帯のさらにその外側は、あまり注目されていなかったと思われます。ところがほ場整備に関連しての発掘調査で、二子山古墳



第3図 三ツ寺居館復原図(『古代東国の王者』による)

のさらに北側から、二子山古墳を望むような形で、冠を付けた首長と思われる人物埴輪、巫女、馬・猪などの動物埴輪の樹立していることが判明しました。復原された埴輪群は1990年7月4日に公表され、狩人と思われる人物は腰に猪の子供、瓜子をぶら下げた、まことに珍しいものでした。それから猪の背中には、矢が突きささり血を流しているようすを描いています。赤い顔料で血を描いており、リアルで優れた埴輪群です。

これまで居館遺構を取り上げましたが、三陵墓東古墳を取り上げます。奈良盆地の東に位置する高原を東山中と言いならわしています。東山中の北部が田原、その南は都祁と呼ばれ、きわめて独立性の強い地域です。その都祁の地域から、三陵墓東古墳が発見されました。都祁地域は盆地状になっていて、奈良盆地からも田原の地からも隔絶している、非常に独立した地形です。寒暑の差の激しいことから、明治の末まで天然氷の製造が行われていました。現在も山間部には、氷を作るために使われた氷池がたくさん残っています。都祁の天然氷の製造は有名で、仁徳紀に都祁の氷室の起源伝承があり、最近、長屋王邸遺跡から「都祁氷室」と書いた木簡が出土して注目されています。この都祁の一番中心地が白石あるいは南庄みなみのしょうで、この地域に三陵墓と呼ばれる古墳群があります。特に三陵墓東古墳は大きく、従来からも前方後円墳ではないかと言われていたのですが、測量調査の結果、前方後円墳であることが判明し、1989年と1990年の発掘調査で、確実に前方後円墳であることがわかりました。注目されますのは、都祁の地にたくさん古墳が存在する中で、三陵墓東古墳が唯一の前方後円墳であること、また他の古墳がせいぜい直径20～30mの小円墳にすぎないのに対して、全長110mの前方後円墳であることです。規模が隔絶して大きいこと、出土した埴輪から築造時期が5世紀中頃から後半であることなどが判明し、古代史研究の上からも非常に重要な発見であると考えられます。と言いますのは、国造制の施行と関係するからです。国造制がいつ頃から施行されたのかについては、いろんな議論があります。近年ではむしろ6世紀代にその施行を考えるという見方が有力になりつつあります。しかし畿内及びその周辺地域では、5世紀後半の雄略朝ごろから、一部、国造制の施行があったとみることも可能です。筑紫国造磐井についての記述に、近江毛野臣について「吾が伴として肩すり肘をすりつつ、器を共にし」た仲であるという表現がみえ、国造の子弟として、トモとなって雄略の宮に奉仕したらしいのです。したがって5世紀後半代から、一部、国造制が施行された可能性があります。都祁国造については、允恭紀2年条に有名な伝承があります。それは、都祁国造が後に允恭天皇の皇后となった忍坂大中姫を侮蔑した話です。すなわち忍坂大中姫が少女のころ、たまたまその住まいの近くを通りかかった都祁国造が彼女を侮蔑したというものです。侮蔑の内容がわかりにくいのです。例えば都祁国造の言った「まぐなぎ」という言葉にはからかいの意味があったらしく、忍

坂大中姫はたいそう恨んだとみえます。允恭即位後、忍坂大中姫は皇后となり、都祁国造を捜し出して処罰しようとするのですが、都祁国造は死を許されて、国造から稲置におとされたというものです。もちろんこの話は史実とは考えられないのですが、『国造本紀』からも都祁には国造がいたことは確実に言えます。そして都祁国造をめぐる伝承が、允恭朝のこととされていて注目されます。国造制の施行された他の地域でも、その地域の首長の勢力が最大になった時に、王権から前方後円墳の築造を認められているようです。6世紀になりますと、少し事情は違うようですが、4世紀代から5世紀代の前方後円墳は被葬者の地位や身分などを表わしていて、国造に任命されることによって、前方後円墳を築造することがあったようです。都祁の在地の勢力が最大になった時期がちょうど5世紀中頃で、そして都祁国造の伝承がある。このことを考えれば、都祁国造に任命された都祁の首長は前方後円墳を築くことができたと解釈できます。そして、稲置におとされたことと、この後、都祁では小規模な円墳しか築造されていないことが結びつきます。三陵墓東古墳はちょうど5世紀中ごろから後半にかけての築造であり、畿内では国造制が一部地域で施行されていたのではないかと判断できる材料になります。全国的にみても、国造のいた伝承があっても、その地域が地形的に独立しているところはなかなか存在せず、国造の支配領域がどこまで広がっていたか、なかなか見極めにくいのですが、都祁国造の場合は、都祁の地が地形的に独立していますから、その支配領域がはっきりします。その地域の古墳の動向を見ることによって、国造とのかかわりをあぶり出せると思われ、とりわけ注目される地域だろうと判断しています。

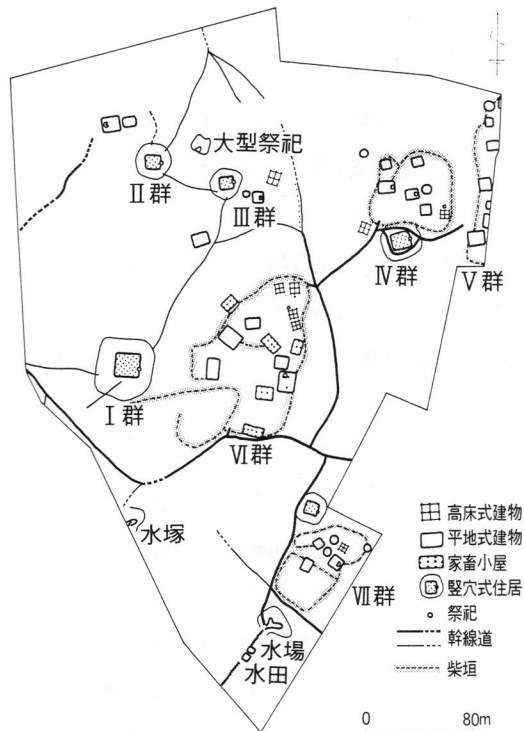
3 躍動する6世紀史

ここ10年間の発掘調査の成果をみますと、特に6世紀後半代の情報量が豊富で、6世紀前半を含めて、6世紀代のようにがよくわかってきたことが評価できると思います。その一つは、黒井峯遺跡です。黒井峯遺跡は群馬県北群馬郡子持村に所在し、周辺には西組遺跡、中筋遺跡など、榛名山の火山灰や軽石に埋もれた遺跡が発見されています。とりわけ遺構の残りのよかったのが黒井峯遺跡です。上越線で参りますと、渋川駅の北4kmぐらいのところに黒井峯遺跡があり、途中には「日本のポンペイ」という看板がたくさん立っています。確かに黒井峯遺跡はその名に値する遺跡だと考えられます。この遺跡は6世紀中頃に埋れるわけですが、その少しあとに大和では藤ノ木古墳が築造されています。ほぼ同時代の和歌山の藤ノ木古墳と東国の上毛野の農村が具体的にわかってきたことは、象徴的なことだと思います。先述のように、榛名山の二ツ岳は2回爆発しているわけですが、6世紀中頃に爆発した際の軽石によって、黒井峯遺跡は埋れています。赤城山の北に続く子

持山の中腹、標高約250mぐらいのところに遺跡があります。現在も遺跡の下の方には、自然湧水がところどころにあり、その水を利用して生活が営まれ、畑や水田が作られていたということがわかります。眼下に吾妻川が流れ、西には榛名山がみえる風光明媚なところですが、6世紀中頃に起こった噴火によって、付近一帯には軽石が堆積しました。軽石は親指くらいの1cmくらいのもから、大きいものでは30cmに達するものがあり、7層にわたって堆積しています。わずか数時間ほどで、2mほども堆積したと推定されています。言ってみれば、6世紀中頃の黒井峯ムラが軽石によって閉じ込められ、タイムカプセルのような状況で発見されたと言えます。軽石は榛名山から飛んでくる途中でほとんど火力がなくなり、物をちょっと焦がす程度であったようです。そういう点で、遺構の保存条件にめぐまれていたわけですから、屋根などは重い軽石で落ち込んだ程度であり、ほとんどは軽石によって当時の状況が閉じ込められたままです。したがって、いろいろな住居、家畜小屋、道などがそのままの状態です。また、柴垣も発見されています。50～60cmごとに杭を打ち、ブナと思われる材を、4段に横架している状況まで判明しました。黒井峯遺跡については、関西ではあまり大きく報道されませんが、東国の6世紀中頃の農村がそのまま凝縮されて残

っていたわけで、大発見といえるでしょう。当時の農村構造を具体的に知ることができますし、また祭祀のあとも残っていて、当時の祭祀や信仰をも考える材料になっています。その意味では、比類のない大発見であったと思います。

それから、話は前後しますが、伊勢崎市では豊城町一崇神紀にみえる豊城入彦命の名を地名としたところですが一から、^{げんのじょう}原之城遺跡がみつかっています。この遺跡は、東西105m・南北165mの居館遺構で、これまで判明している最大の居館遺構です。溝によって区画されていて、その点でも三ツ寺居館遺構と似ており、工房跡、祭祀跡もみつかっています。ただ、三ツ寺居

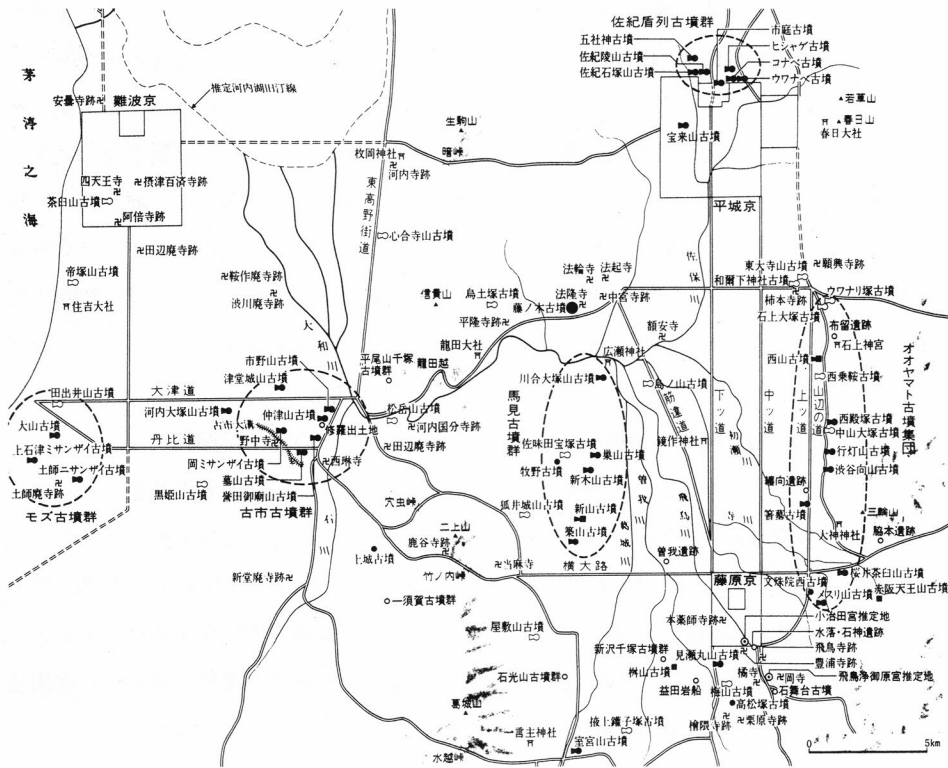


第4図 黒井峯遺跡家屋単位群模式図
(石井克巳による)

館と違う要素は、原之城遺跡に対応する首長の古墳がまだ発見できないことです。すでに消滅している可能性もあるのですが、原之城遺跡にどの古墳が対応するのか、今後の課題です。

次に綿貫観音山古墳と藤ノ木古墳です。綿貫観音山古墳は、1967年と1968年に発掘調査が行われています。1979年に、巫女や三人童女といわれる有名な埴輪群が復原されました。井野川流域で、三ツ寺遺跡のさらに下流域に、6世紀後半代、綿貫観音山古墳が築造されます。注目されますのは、築造時期が藤ノ木古墳とほぼ同じということでしょう。藤ノ木古墳を考える場合、綿貫観音山古墳との比較という観点から、いろいろな視点が生まれてくるだろうと考えています。この古墳は、全長97mの前方後円墳でありまして、二重の周濠をもち、横穴式石室の入口付近から埴輪が墳丘をめぐっています。未盗掘でしたので、大量の副葬品が見つかっているのですが、とりわけ獣帯鏡や藤ノ木古墳から出土したのと同じ金銅製の大帯、ガラス製の小玉類、馬具類が注目されます。そして、藤ノ木古墳と同様、側壁に鉄鉤(鉄の釘)を打ち込んでいます。おそらくそれでペール状のものを垂らし、玄室の中を二つの空間に分けて、奥の石棺の被葬者に対し、手前の空間で諸儀礼を行ったと思われる。綿貫観音山古墳から、金銅製の水瓶が出ています。この水瓶と比較すると、形は小さいのですが全く同じ型式のものが、北齊の庫狄廻洛^{こてきかいらく}という人物の墓から出ています。この庫狄廻洛という人物は、506年に生まれて562年に亡くなった、北齊のきわめて地位の高い人物です。これはまた、毛野の首長が朝鮮経営にかかわっていたことを示しています。新羅は565年に、百済は570年に北齊に入貢していますから、新羅や百済経由で伝えられたものでしょう。藤ノ木古墳を考える場合、綿貫観音山古墳と比較する、あるいは藤ノ木古墳と同様の遺物—金銅製の冠や沓—を出土している古墳と比較することによって、いろいろなことがわかってきます。

藤ノ木古墳についてみますと、発掘成果の第一は、斑鳩前史説明の手懸りが得られたということでしょう。すなわち、推古9年(603)に斑鳩宮が造り始められて、推古13年(607)に聖徳太子は斑鳩宮へうつるわけですが、その前の状況は不明でした。そういう点で、藤ノ木古墳は斑鳩前史、とりわけ斑鳩の地の開発を考えるうえで、大きな手懸りとなりうると思います。馬具や布類にみられますように、東アジア世界を含んだ国際性が示されています。また、玉纏きの大刀にみられますように、倭国に古くから伝えられた固有の技術の系譜もあります。石室内の状況から、当時の喪葬儀礼の復原もできます。また、なによりも重要なのは、斑鳩の地が難波津と磯城・磐余の地域、時代を下げればさらに飛鳥の地域とを結ぶ中継点であることです。陸路においても、また大和川水運を利用して難波津に至る場合にも、斑鳩は中継点であり、そこに藤ノ木古墳が築造されたわけです。このことが



第5図 古代の大和・河内と藤ノ木古墳略図(『大系日本の歴史2古墳の時代』による)

もっとも重要な点だと思います。被葬者についてもいろいろな議論があるわけですが、藤ノ木古墳と同じような遺物を出す古墳が全国にたくさんあり、いずれの古墳も6世紀代における各地域の首長墓であって、水陸交通の要衝に築造されていることが多いのです。これらの古墳の副葬品は、藤ノ木古墳と共通した性格をもっています。

先ほどの綿貫観音山古墳や静岡市浅間神社境内の賤機山古墳、出雲西部の斐伊川下流域の今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳など、6世紀中頃から後半代に築造された前方後円墳で、各地域の首長墓と思われる古墳から、冠や沓など、藤ノ木古墳と同じ金銅製品が出ています。おそらく、それらの首長は対朝鮮経営、特に伽耶・百濟などの諸国との外交交渉に従事した可能性が強いと思われます。藤ノ木古墳の発掘は、まことに大きな意義を持っています。

4 古代の丹波

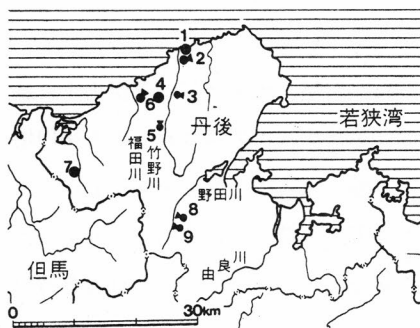
この10年間、丹波・丹後地域に関連する情報が増加してきたことが注目されます。713年に丹波国から丹後国が独立したわけですが、古代の丹波についてはむしろ丹後地域に注

目すべきものがあります。現在、峰山町に丹波という地名が残っていますように、元来、丹波の中心は丹後の峰山を中心とした北部一帯でした。記紀にもいろいろな伝承がみえています。たとえば、丹波大県主の娘である竹野比売が開化の妃になったという伝承や、あるいは丹波道主王の娘、日葉酢媛が垂仁との間に景行などの皇子を産んだ伝承などです。

まず加悦谷^{かぎだに}についてですが、加悦谷は野田川上流域の奥まった谷合いで、地形的にも独立性の強いところです。「加悦」という地名も注意されますし、地名の読み方でも明石^{あけし}や温江^{あつえ}など、注目されるものがいろいろあります。また蛭子山古墳^{むすこやま}、作山古墳^{つくりやま}が整備中です。これは、ふるさと歴史の広場整備事業の一貫として、保存工事が施されているものです。加悦町は埋蔵文化財に対して熱意あふれるところで、町おこしにつながる事業として、蛭子山古墳群や作山古墳群の整備が行われており、日本全体の文化財保護行政を考える上でも、モデルケースになるだろうとの印象を持っています。これは地元の熱意があったからこそ、保存整備ができたのだらうと思います。この地域では、4世紀後半に蛭子山古墳が造られ、4世紀末に作山1号墳が造られています。加悦谷には、630基もの古墳が集中しています。細長い谷地形ですから、4世紀後半からの首長墓の系譜をずっと追えるところです。また作山1号墳や2号墳のまわりから、30基もの木棺、土壙墓、埴輪棺が検出されていて、加悦谷における階層制などがあぶり出せるのではないのでしょうか。

1981年に6世紀後半の横穴式石室をもつ湯舟坂2号墳から環頭大刀が出土し、1987年には丹後町の高山12号墳からも金箔を貼った環頭大刀の柄頭が2個出土して、6世紀後半代に丹後が脚光をあびたことがわかってきました。

また、丹後地域には巨大な前方後円墳が集中しています。網野銚子山古墳は全長200m



第6図 丹後の主要遺跡略図
(『丹波の古墳』Iより一部加筆・修正)

- | | |
|------------|------------|
| 1. 産土山古墳 | 2. 神明山古墳 |
| 3. 黒部銚子山古墳 | 4. 遠所遺跡 |
| 5. 湧田山1号墳 | 6. 網野銚子山古墳 |
| 7. 湯舟坂2号墳 | 8. 蛭子山古墳 |
| 9. 白米山古墳 | |

の5世紀前半の前方後円墳で、山口県から青森県にいたる日本海沿岸で最大の前方後円墳です。神明山古墳は、4世紀後半から5世紀初めに築造された全長193mの前方後円墳で、やはり日本海沿岸で第2位、先ほどの蛭子山古墳は全長150mで第3位というふうに、日本海沿岸でも有数の古墳が、4世紀後半から5世紀中頃にかけて丹後地域に集中しています。しかしこの時期を境に、巨大古墳は築造されなくなります。これらの巨大古墳は、峰山あたりを生産基盤とする首長の墳墓と思われませんが、6世紀後半になって、高山12号墳

や湯舟坂2号墳が築造されます。久美浜湾に注ぎ込む川上谷川の上流に湯舟坂古墳群があり、湯舟坂2号墳が見つかっています。このように6世紀後半代になって、再び丹後の地域に豪華な副葬品を持つ古墳が築造されるようになります。

門脇禎二氏によって丹後王国論が提唱されていますが、5世紀中葉からほぼ1世紀の間、首長墓の空白であった期間があり、そのあたりをどのように理解したらよいか問題が残ります。湯舟坂古墳群のあたりは、山陰道から分岐して丹後に入るところにあたります。付近に熊野郡衙の想定もされていて、ここから峰山に抜けることができます。そういうところに6世紀後半代に首長墓が築かれているわけです。

遠所遺跡^{とんじょ}は竹野川流域にあり、近くに網野銚子山古墳が位置しています。竹野川流域が大砂鉄地帯であることが判明し、本当に驚きました。遠所遺跡では砂鉄精練を行っていたことがわかりました。分析結果によりますと、砂鉄精練は6世紀後半代に遡るようですが、遠所遺跡のすぐ近くに5世紀中頃のニゴレ古墳があり、遠所遺跡からみついている遺物のなかにも、5世紀代に遡るものがあるようです。砂鉄精練の時期がもう少し遡ることになれば、網野銚子山古墳などの時期と接近していくわけですから、非常に興味深い視点が開けていくと思います。

日本海沿岸については、ここ10年間、日本海文化論という概念が提起されています。古代の日本海沿岸には、瀉湖^{かたこ}(ラグーン)や入江のような地形が多く存在しました。今でも八郎瀉や新瀉などの地名があるように、瀉がたくさんあって、古代ではそれらを利用して水運が盛んでした。天然の良港が多数存在したことが、出雲・但馬・丹波・若狭・越中などに、巨大な古墳が造られた背景にあります。これは重要な視点ですが、厳冬期になると、港としての機能は縮小します。そうすると、丹後地域に巨大な前方後円墳が築造された背景としては、さらにもう少し別の条件を考える必要があるわけですが、もし遠所遺跡における砂鉄精練の時期が遡るのであれば、鉄資源を媒介に説明することもできるかと思えます。これまで岡山県久米町^{おおぞういけみ}の大蔵池南遺跡が、砂鉄精練では最も古い6世紀後半代のものと判明していますが、遠所遺跡もそれに匹敵するもので、奈良時代になっても稼働しています。古代丹波を考える場合、遠所遺跡の持っている意味は測りしれないものがあると思います。今後の調査で、もっと新しい大発見があるのではないのでしょうか。

5 7世紀史の解明

ここ10年、飛鳥を中心とした地域でも、重要な遺跡・遺構が発見されています。まず豊浦寺下層から、建物遺構が検出されたことです。1985年に豊浦寺の創建当時の基壇(講堂と推定)が発見されたのですが、その基壇のさらに下層から、宮殿風の建物が検出されま

した。「元興寺縁起」などの記述から、推古天皇の豊浦宮の遺構であることはまちがいないと思います。飛鳥地域において、宮の名称が確定ができた最初の事例ということで、非常に注目されます。

飛鳥の雷丘のすぐ近くから、1987年に雷丘^{いかづちのおかとうほう}東方遺跡が発見され、奈良時代の小治田宮であることが判明しました。淳仁天皇は、一時期、孝謙上皇と不和になって、飛鳥の小治田宮にいたのですが、「小治田宮」と書いた墨書土器が10点あまり出土し、奈良時代の小治田宮が雷丘の東南にあったということが確定しました。問題は、推古天皇の小治田宮がどこかということですが、従来、甘樫丘のすぐ北のところに古宮土壇と呼ばれる小さな土壇が残っており、そこに比定されていたわけです。そして、発掘調査の結果、7世紀前半の小規模な庭園遺構も発見されているのですが、奈良時代の小治田宮が雷丘のすぐ東南の地であれば、推古の小治田宮もそこに所在した可能性が生まれてきたわけです。石神遺跡の一画では、推古朝に遡る小さな池が検出されていて、注目されます。

桜井市の上之宮^{うへのみや}遺跡から、聖徳太子の上宮^{かみつみや}かと思われる遺構が見つかっています。聖徳太子にかかわる宮であるかどうかはさておきましても、やはり豪族居館の範疇からみて、第一級の遺構だと考えています。遺構の保存という点では少し残念な結果になっているわけですが、重要な発見です。また、1982年に法隆寺よりも時期的に遡る山田寺の創建当初の東面回廊がそのまま見つかりました。

水落遺跡の発見は1981年であり、水時計(漏刻)の遺構ということが確定しました。ただ、問題として残りますのは、水落遺跡の柱が柱穴を刳り貫いた花崗岩の礎石の上に建てられ、さらにグリ石でいずれの礎石もびくともしないような厳重な構造になっている点です。それで、階下に水時計を想定することは問題ないのですが、楼上には例えば鐘とか鼓などの施設を置くには、あまりに厳重な構造です。すぐ東北の地に1903年に道祖神像や須弥山石が発見された石神遺跡があり、それらの石造物は飛鳥資料館での復原実験で、噴水施設であることがわかっています。水落遺跡の楼上には、石神遺跡とかかわる施設が存在した可能性もあります。須弥山石や道祖神像から水を吹き出させるとしますと、水圧をかけサイホンの原理を用いなければなりませんから—今の石神遺跡の発掘状況では、どうして水を吹き出させるのかわかっていません—水落遺跡の楼上の施設は、あるいはそういうことにかかわっているのかもしれませんが。

水落遺跡や石神遺跡については、飛鳥寺の西の空間にあるという点が重要だと思われまます。飛鳥寺の北門の場所がわかっていますので、石神遺跡や水落遺跡は飛鳥寺の西の空間に存在するとみてよいかと思いますが、飛鳥寺の西の空間ではいろいろな儀礼が行われています。孝徳天皇の即位の式がこの広場であったようですし、「大槻樹下の誓い」もここ

で行われています。天武朝にいたるまで、飛鳥寺の西では隼人や蝦夷を饗宴してもてなしたという記事がいろいろみえるのですが、その一画にこれらの施設があります。こうした点が重要な意味合いを持ってくるだろうと思います。

6 王権・国家と津・倉庫群・橋

ここ10年の発掘成果で、王権あるいは国家とかかわる津、倉庫群、橋が発見されていることも重要なことです。まず鳴滝遺跡が注目されます。この遺跡はちょうど紀ノ川河口に近い所にあります。現在の紀ノ川は加太港の方へ流れていますが、古代では和歌山市内の和歌川の流路でありまして、和歌浦に注ぎ込んでいました。この紀ノ川河口に紀伊水門きののみなとがあったわけですが、鳴滝遺跡は紀伊水門にかかわる倉庫群、あるいは鳴滝遺跡からだ孝子峠を越えて淡輪に通じていますので、淡輪の港にかかわる倉庫群であるかもしれません。

1987年には難波宮の下層から、5世紀後半代の大倉庫群が見つかっています。現在の大川(旧淀川)に面した上町台地の先端部にあたり、難波津を支配した王権の倉庫群でしょう。大阪市平野区の高廻2号墳から出ました舟形埴輪なみはぎなどから、古代船「浪速」の復原が行われ、航海実験が行われたことは記憶に新しいものです。これらのことから難波津の景観がいろいろ想像できます。

1989年には岡山県の足守川の旧河道から、吉備津と考えられる津寺遺跡が見つかっています。7世紀前半代に築かれた大規模な堤防で、4,000本余りの杭が発見されたことで注目されています。

福岡県の博多駅の南1.3kmほどのところから、比恵遺跡が発見されています。ここは弥生時代から古墳時代を通じて、各種の遺跡が集中しているところですが、この比恵遺跡からは、6世紀中頃から後半にかけての倉庫群が見つかっています。第8次調査で判明したのですが、古くは『魏志倭人伝』にみえる奴国の所在地であり、また宣化紀2年5月条には那津口に官家を修造したという記事があって、それとかかわる遺構かと思われます。

平城京の南で、羅城門から約1.6kmぐらいのところから稗田遺跡が発掘され、下ツ道と大運河にかかる橋が検出されていることも注目されます。直径50cmほどの巨大な橋杭です。平城京から少し離れていますが、出土した木簡の内容から、国家によって管理された橋であるということがわかります。

1988年には滋賀県の瀬田の唐橋のすぐ下流域から、7世紀後半代の勢多橋の遺構が発見され、これも注目されるものです。時間の関係で詳述しませんが、注意しておきたいのは、『近江名所図会』にありますように、近世においても勢多橋は中洲を利用して架けていることです。出土しました橋脚の場所も、中ノ島につながる地点であり、古代の橋は中洲を

うまく利用して造ったようです。古代の宇治橋も、今の橋島をうまく利用して架けたようでありまして、古代における橋の架け方にも注意する必要があると思います。

7 注目される生産遺跡

時間が残り少ないので、7と8については簡略に述べます。

大阪府高槻市の新池遺跡では、5世紀中頃、現在、継体陵とされている太田茶臼山古墳に埴輪を供給した埴輪窯が見つかっています。また6世紀前半代の今城塚古墳に供給した埴輪窯や工房と、埴輪を作るための埴土はにつちの存在することも判明しました。京都府木津町の上人ヶ平遺跡しょうにんがひらでは、1989年に5世紀代中頃の古墳に供給した埴輪窯が2基と、また奈良時代に平城宮や南都の諸大寺に供給した瓦の生産工房が見つかっています。

8 文字資料の発見一木簡

長屋王家や二条大路から発見された大量の木簡群は、木簡研究の上で画期的なものです。従来、発見されていた木簡の総数は、古代から近世初頭にかけてのものが約4万点ほどであったのですが、1988年に長屋王家から3万点、1989年に二条大路から4万点が発見され、合計11万点となったわけです。これはまことに画期的な大発見です。また長屋王家木簡はだいたい和銅末年から霊龜年間、二条大路木簡は天平8、9年と、年代を限定できるものがたくさん出土しており、内容も豊富で、画期的なものです。

9 ま と め

1. ここ10年間に発見された重要な遺跡や遺物について、古代史からみた意義について簡単にふれておきたいと思います。この10年間でふりかえてみて、やはり、考古学や古代史に対する関心が非常に高まったということがあげられます。それは、現地説明会が行われるとたくさんの参加者があり、埋蔵文化財についての関心が高くなったということです。現地説明会に参加される方々のお話をおうかがいしますと、それを楽しみとされ、生きがいとじていらっしゃる方も多ようです。各地で行われている古代史の講座、考古学の講座、あるいはカルチャーセンター、公民館での講演会などに、たくさんの人々が集まれるようになったということは、やはりこの10年間に古代史や考古学への関心が高まったということのあらわれだろうと思います。

そして、そうした考古学や古代史関連のニュースが大きく評価され、政治や社会の大きなニュースとともに、テレビや新聞のトップニュースとしてとりあげられることさえたびたびあります。これは10年前をふりかえてみて、大きな進歩だと思えます。ただ、研究

者の立場からいいますと、報道される方々の判断に少々ゆれがあるようで、A紙では大きくとりあげるけれどもB紙では無視するという傾向がみえておりまして、少し問題を残しています。

また発掘調査によって発見された遺跡を、村づくりや町づくりに生かす試みが積極的に行われるようになってきたことも、大きな特色だと思われれます。先ほど述べました加悦町の事例などがそうでありまして、また、復原修羅の実験、あるいは古代船「浪速」の航海実験などのイベントが行われ、多くの関心を集めているということも大きな特色といっていると思います。黒井峯遺跡は「日本のポンペイ」という形で大きくとりあげられ、島根県斐川町は荒神谷遺跡のある町として全国的に知れわたり、たくさんの人が訪れるようになったというように、遺跡が村づくり、町づくりに生かされています。そういう点でも非常に注目すべき10年間であったと思います。

古代史研究の立場からいいますと、大阪では在日朝鮮人の人達を中心に、日本古代の渡来文化を大きく評価しようという大きなうねりがあり、最近、四天王寺ワッソという大規模なイベントが多くの人々の関心を集めて行われました。四天王寺ワッソは大阪の祭りとして、今後、恒例行事となっていくようです。そうしたイベントに、多くの若い人達が積極的に参加する気運がうまれてきたことも、やはり大きな成果と思われれます。

これと関連しまして、ユニークな博物館がどんどんうまれています。千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館がそのはしりで、広島県福山市にある広島県立博物館では草戸千軒町遺跡を復原展示し、注目されます。また各地で、地域の人々の運動にささえられて、遺跡を生かす展示がされています。

藤ノ木古墳をめぐる各種のシンポジウムがあり、国際交流が行われていることも注目されます。研究者の間にもいろいろな交流が生まれ、私もいろんな新しい視点を教えていただきました。

2. 2番目としまして、今日、重要な発見をとりあげましたが、重要な発見が相次いだということは、とりもなおさず開発が大規模化したことの裏がえしでもあるわけで、遺跡の保存ということと深いかわりがあり、複雑な問題を残しています。開発と保存ということが、従来にもまして大きくクローズアップされてきました。長屋王家木簡がみつかって、奈良時代の研究材料は一躍ふえたわけですが、百貨店ができて遺跡はつぶされてしまったという事実があります。また開発が進むにつれて地価が高騰し、遺跡の保存は非常に難しい状況になってきている実状があります。

重要発見の相次いだ背景には、また一方、保存技術が進んだということもあげられます。先ほど金石文の事例をあげましたが、いずれも古くに発見されて、その保存処理の過程で

発見されていることです。稲荷山鉄剣や岡田山鉄刀あるいは稲荷台鉄剣などがそれです。技術の進歩もこの10年間まことに著しいわけでした、コンピューターによるデータベース化が進み、あるいはコンピューターグラフィックによって立体図を見ることができ、また、藤ノ木古墳で実施されたファイバースコープによる内部透視、阿武山古墳の古いX線写真をコンピューターで再解析して、被葬者が馬から落ちて骨折したとか、玉枕が復原されたとかいう成果がありました。また滋賀県の宮町遺跡は、紫香楽宮であることが判明しつつある遺跡ですが、木の年輪によって年代を決める年輪年代学が大きな寄与をしています。漆紙文書の発見や難解な木簡の解説も赤外線テレビが有効な力を発揮して、我々はそれによって助けられているところが多々あります。

重要な発見が相次いだということは、大規模開発とともに技術の長足な進歩があって、それに支えられているということだろうと思うのです。

3. 3番目に先ほど藤ノ木古墳であげましたが、学際的な交流が非常にさかんになってきて、木簡学会や条里制研究会などが発足しました。埋蔵文化財の写真をとる方たちの集まりである埋蔵文化財写真研究会というものができ、『埋文写真研究』という雑誌が発行されています。これもそうした新しい学会の動きです。

4. 大発見に支えられてのことですが、4番目としてやはり大胆な発想の転換が行われた10年であったと思います。丹後地域が大きくクローズアップされたことにもかかわってきますが、日本海文化論という概念が提示されて、いろんな見直しがされたということはその一例だと思います。また従来全くみすごされていた、皮のようなものを赤外線テレビで見ると実は文字があり、それで漆紙文書の発見につながったわけですが、そういうふうな発想を全くかえることによって、いろいろな発想や新しい研究のつみかさねが行われた10年であったと思います。

(わだ・あつむ=京都教育大学教授)

本稿は、1990年11月3日(土)に京都市社会教育総合センターで行った当調査研究センター10周年記念特別講演会「埋蔵文化財この10年」での題目と同名の講演記録を活字化したものである。